

偉大なる大地での大冒険

第13期 OG 山本 彩理

ここは、オーストラリア ヴィクトリア州 グランピアンズ国立公園内某所。時刻は、18:33（日没まで1.5時間）。そして今、私の目の前に広がっているのは、緑・枯れた木々、見渡す限りのいばら。もうかれこれ、1時間、この景色から抜け出せずにいる。私はもうこれまでか...

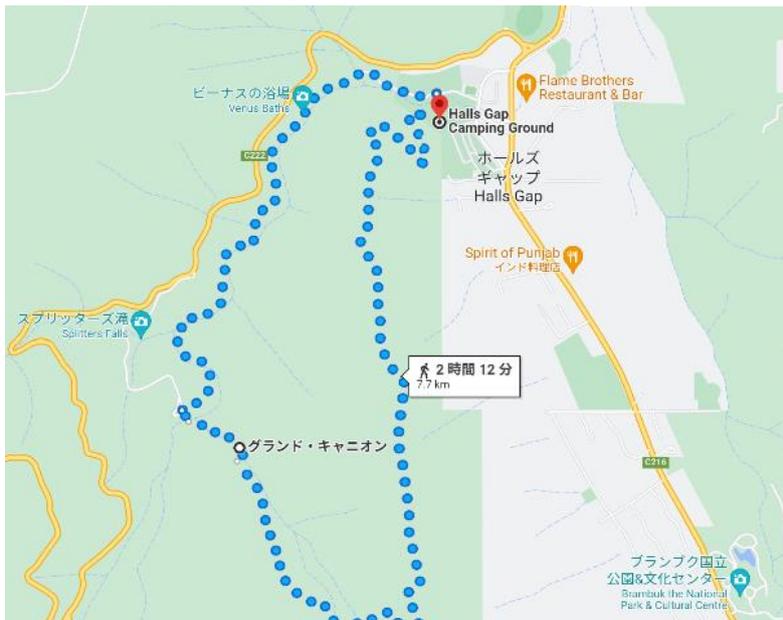
———6時間前———

「最長でも往復3時間で戻ってこられるルートらしい。登山サークル出身のさりなら余裕だね。」と友人。

国立公園のふもとに到着したのは12時。「運動するのだから体力つけなきゃね。」と家で用意したジェノベーゼパスタをほおぼる。お弁当持ってくるとか、できる女子じゃんと自画自賛。テンション高めである。メルボルンの天気はここ数日、雨天、曇天だったようで、晴れ間が見えた空に自然と頬がゆるむ。



国立公園のふもとで昼食をとっていたときの景色



唯一のガイド、Google Mapで示されたルート

登山口からスタートしたのは13時。有名な国立公園の入り口にしては、簡素な鉄格子のゲート。大丈夫かな？ まあでも人が数人入って行くのが見えたし...。Aちゃんが、Google Mapを指さしながら、「今日はこのルートだからね。反時計回りに行くよ。目指すは、このピナクル展望台。上りと下りで別ルートの方が楽しめるみたい」とのこと。

足取り軽く進んでいく。赤茶色の土。ごつごつした岩。なんだ

か日本では見ない景色だよな...すごいね！と写真をパシャリ、パシャリ。岩場に突然現れたトカゲに話しかけたり、小川で遊ぶキッズたちを眺めたり...のんびり、ゆっくり歩く。だって、オーストラリアは今、サマータイム。日没は20時だ。余裕、余裕。



展望台付近での著者。壮大な景色が広がっていた。

スタートから2時間後、5m近い岩が両端にそびえたつトンネルを抜け、ついに展望台に到着。断崖絶壁に足がすくむ。結構上ってきたつもりだったのに、標高は、715m。(日本で言うと、高尾山より高く、筑波山より低いくらい) そんなに高くなかった...がーん。写真もそこそこ岩陰で一休み。なんてったって、オーストラリアの紫外線は、馬鹿にならない。岩山には日差しを遮るものがなく、この地点に

着くまでに、少なくとも2度、日焼け止めは塗りなおした。もちろんSPF50+。(著者は日焼け止めブランド担当ゆえ、本編とは関係ないですが、紫外線防御啓発のために、入れさせていただきます。)

「あとは下りだね。帰りの山道、暗い中運転するのは心細いから、早めに帰ろう」と黄色い矢印をたどって、足早に下る。Follow the yellow brick road〜Tie a yellow ribbon round the〜そんな歌ありましたかね。(オズの魔法使い、幸せの黄色いリボン) 黄色、黄色・・・あれ？次の黄色がない。どこ??? 頂上から下山30分後、黄色の矢印がまったく見つからなくなるトラブル発生。

「でもさ、ここの位置から下っていけば、黄色の矢印見つかるよ。観光地だから人が通ったところもわかるはず。」と期待を込めて、ぐんぐんと山道へ。このとき私はすっかり忘れていた。頂上までの道のりで他の登山客に遭遇したのは3組ほど、そしてその人たちは全員、別ルートで下山していそうだったこと。



展望台までの道のりで撮影したパノラマ写真。登山客はほとんどいない。

そんなこんなで迷って、1時間。Google Mapだけを頼りに下山していたが、ついに位置情報も受信できなくなり、現在地もわからなくなる。どうにか位置情報が受信できる位置まで戻り、再びルートと思しき道に戻れるように軌道修正。これを2・3回繰り返した。

苦勞の末、ようやく友人が指さしていた「登山ルート」にたどり着いた。が、どうみても周りに黄色い矢印はない。人の通ったような道でもない。嵐でなぎ倒された木々が、私たちの行く手を阻んでいた。Map上の「登山ルート」を見ると、その印は、水色の点線。「これ、もしかして...小川の印」じゃなかったっけ？」

「え、だって、登山のアイコンあったよ?」「Aちゃん、もしかして、それ、沢登りできますよ、のサインだったのかも?」「沢登りってなに...登山じゃないの??」

登山ルートだと思っていた道、目の前にはちよろちよろ水が流れる小川が。うん、そうよね。この時間から正規の登山ルートを探すのは、難しいだろう、と判断し、小川を下ることに。この小川を下れば、いつしかあの上りのルートでキッズたちが泳いでいた場所にたどり着くに違いない。そう信じて。

小川をたどること10分。突然どこからともなく、人の声。低木の合間から空を見上げると、ちょうど10M先にそびえたつ大きな岩の上に、人影が。

人に遭遇できたことに安心と高揚感を覚えながらも、彼らを見失ってはいけないと必死で叫んだ。

“Hey!!! Excuse me!!! We have lost track! Help!! Somebody, PLEASE HELP US!!!!”

人生で一度たりともヘルプと叫んだことはないが、緊急時の人間の底力はすごい。過去1番の大きな声が出た。すると、1組の男女が岩の上からこちらをのぞき込んでくれた。

“How the f××× did you get down there?!?!”

無理もない、こちらは登山道からかなりはずれた低木の合間から声を出しているのだから。ここで私のスーパー社交的な友人が、

“So, we were on our way back from the lookout and...”

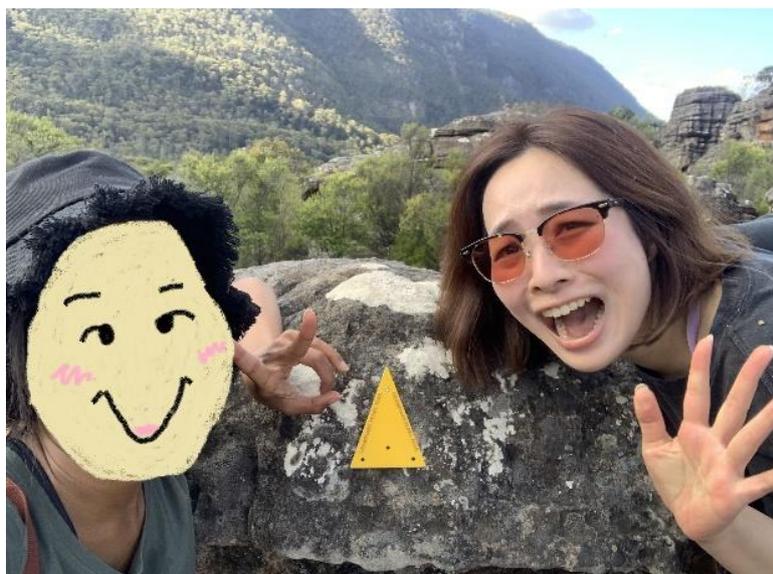
メルボルン市内でいつもするかのようなsmall talkをはじめようとしていた。一方、生死の危機を感じていた私は、

“Please, just stop right there so that we can reach you!!”

とその男女にその場にどまってもらうように叫ぶ。彼らの声を頼りに、目の前に広がるいばらの低木をかき分けていく。いかに早く、彼らにたどり着くか、それしか頭になかった。

彼らがいた岩場にたどりつき、ちょうど人が1人上がれそうなところを見つける。どうにか岩場をよじ上ると、先ほどの男女はもういなかった。

「こっちは遭難しかけているのにいなくなっちゃうなんて薄情ね。」ぶーぶー文句を言いながら、ただ、正規のルートに戻れたことがうれしい気持ちと、どうにかこれで日本に無事戻れそうだ、という安堵が一気に胸に押し寄せた。



2時間ぶりの黄色の矢印に歓喜

「やった！黄色い矢印が見えたよ！！」正規ルートであることを証明する、黄色い矢印。実に2時間ぶりに見た矢印だった。Google Mapの位置情報も正常に作動し始めたので見てみると、頂上までの道のりにたどり着いたことに気づく。頂上からはぼ進んでいないことに気づき、落胆するもここまでくるとすこぶるポジティブである。「じゃあ、来た道に戻ればいいね」とそこからは爆速で下山。



カンガルーは左手に。

5時間前にスタートした登山道に着いた頃には、日が沈みかけていた。

「見て、野生のカンガルー。」振り返ると、カンガルーの親子が地面に落ちた木の実を食べていた。

「ほんとだ。すごいね。」と写真を撮った...つもりだったのだが、相当まだ動揺していたらしい。

カンガルーは見切れてお

り、何を撮ったのかわからない写真になってしまった。

昼食の Pasta を食べた場所の横の売店が開いていたので、2人で飲み物を買って、無事生きて帰れたことを祝う。この時に飲んだスプライトの味を、私は一生忘れないだろう。文明に戻れた嬉しさを噛み締めるのもつかの間、今夜の宿まで、1時間半車を走らせることに気持ちを切り替え、エンジンをかける。帰り道に車からみた大地の先に沈む



感動して撮影。

オレンジの夕陽。特定の宗教を信仰しているわけではないが、この時ばかりは神の存在を感じずにはいられない、そんな夕陽だった。

登山客を見つけ、ルートに戻れた地点



その晩、宿に到着し、夕飯を食べながら、友人と Google Map を見ながら、いったい全体私たちはどこでルートを外れたのか、どこをさまよっていたのか、振り返った。そして、行きついた結論が下記ルート。後日友人の現地知人に話を聞いたところ、彼も全く同じ個所で黄色い矢印を見失ったが、Google Map 上の道筋が右手に直角に伸びていたので、そちらを進んだところ、ルート通り下れたらしい。「君たちと同じように迷った人がいっぱいいるだろうね」とのコメントをもらった。私たちがポンコツなだけだと思ったが、その言葉を聞いて少し救われた気持ちになった。

みなさまご無沙汰しております。お元気ですか。ご挨拶が遅れましたが、今年はこのような旅の記録調にしてみました。昨年までは、「相変わらずです」という調子で、文章をしたためておりましたが、上述したような調子で凶らずも大冒険に身を投じて 2022 年を締めくくりましたので、シェアさせていただきます。みなさまが何かこのエッセイから得られるか、と問われると、おそらく言葉に詰まりますが、「へー」となめ読みしていただければと思います。社会人 6 年目となりましたが、仕事もプライベートも「面白そう！」と思うことについては、「まずはやってみる」をモットーに日々生活しているので、刺激的な毎日を過ごすことができています。上記エピソードは、年末年始に行ったオーストラリア旅行（コロナ後の初・海外）の中での出来事でした。「私はここでもう終わりかな。」と一時は死を覚悟したスリリングなエピソードでしたが、2023 年もさらなる冒険を求めて、日々を過ごしてまいりたいと思います。みなさまのスリリングなエピソードも、ぜひ次回お会いした際に聞かせてください！